

■ ユーロ反発も市場の期待がやや先行か？

前回更新分の本欄で、ユーロ/ドルについて「4/19 高値と 5/14 高値を結ぶレジスタンスラインをクリアに上抜けるかどうか」が一つの焦点になる」と述べた。実際、今週 4 日には同ラインをクリアに上抜ける格好となり、執筆時までには一時 1.1800 ドル処を試すレベルまで値を戻す展開となってきている。

あらためて振り返ると、やはり 5 月 29 日に一時 1.1500 ドルの心理的節目を試す展開となったことや一目均衡表の週足「雲」上限が当座の下値サポートとして意識されやすかったこと、加えて月足「雲」下限が下値を支える格好となったことなど、複数の重要な節目が点在する水準で一旦下げ渋る展開となったことは見逃せない。

さらに、足下ではイタリアやスペインの政局がとりあえずの落ち着きを見せていることや ECB の政策方針が出口戦略に傾くと期待があらためて強まっていることなども、ユーロ反発の大きな要因となっている模様だ。実際、昨日 (6/6) も ECB のプラート理事が「来週の ECB 理事会で債券買入の年内終了を議論する」と述べたことで、ユーロ/ドルの戻りは一気に勢いを増すこととなった。

とはいえ、ユーロ圏の域内景気が年初から減速続きであることについて、それを一過性のものと判断することはまだ難しい。また、一部の ECB 理事らが少々タカ派的な見解を述べたところで、肝心なドラギ総裁の見解がそれよりずっと慎重であったりするケースはよくある。

まして、米欧の通商摩擦問題が今後一段と混迷の度合いを強めて行く可能性も否定はできず、ここで安易に金融緩和の出口に傾く姿勢を強めることはやはり躊躇われよう。加えて、目下の欧州で台頭するポピュリズムの流れへの警戒は容易に解けるものでもない。

市場が期待先行でユーロを強く買い上げるときというのは、往々にして後に裏切られることが少なくないので、そこは十分に注意したい。個人的には、来週 14 日の ECB 理事会を控えて、ここからユーロ/ドルについて戻り売りを仕掛ける算段で臨みたいと考える。

今後、仮にユーロドルが 1.1800 ドル処をクリアに上抜けてきた場合には、まず 4/17 高値から 5/29 安値までの下げに対する 38.2%戻しの水準でもある 1.1850 ドル処、あるいは 50%戻しの水準に近い 1.1950 ドル処が当面の上値の目安になってくると見られる。

一方のドル/円については、目下のところ 200 日線が比較的強めの上値抵抗として目の前に立ちはだかっている感がある。そこは 5/21 高値から 5/29 安値までの下げに対する 61.8%戻しの水準でもあり、一旦戻り一服となるのも致し方ないところではある。

まして、明日 (6/8) からカナダのシャルルボワで G7 サミットが開催されることを考えると、やはり市場には様子見ムードが漂いやすくなるだろう。とりあえず、ここはイベント通過後に市場のムードが多少なり変化するかどうかを見定めたい。



なにしろ、米国の景気拡大は一層加速してきており、米株式市場における主要な株価指標はいずれも超強気の展開を続けている。

なお、左図に見るように、ドル/円の月足チャート上において 31 カ月線と 62 カ月線が近い水準でともに上値の重しとなっている点にも注目しておきたい。

少し長い目で、両線を順に終値で上抜けるような展開になってくると、そこからの上値余地は一気に拡大することとなるだろう。

(06月07日 11:50)